

## 〔編集後記〕

今回の編集後記は、2020年4月から本誌の編集主幹を務めることとなった高橋裕樹が担当します。

私は1989年に本学大学院において医学博士学位を取得しましたが、その当時の大学院生の多くは本誌に学位論文を提出し学位を取得しており、年度末に掲載証明をもらって、審査に間に合わせるため自費で別刷りを作成する必要があり、校正のために印刷所を往復した経験は珍しくないこととっていました。言い訳をすれば、現在のような用意周到立った大学院生活を指示されることなく、臨床と研究を体力にまかせて行っていた時代であり、英文誌にアクセプトされるような論文を仕上げる余裕がなかなか、なかったとも言えます。その後、大学院生の多くが英文誌にアクセプトされた論文で学位取得することが増え、その背中をみて育った大学院生がまた、それを見習うこととなり、本誌の学位論文掲載誌としての利用は減少したという経緯については、過去の編集後記（特に2015年、2017年）も参照にして頂きたいと思っております。本学の理念の1つである「国際的・先端的な研究を進めます」を踏まえ、研究成果を海外に発信するため、英文誌に発表するのは至極当然の状況ですが、その中で本誌の存在意義をどう位置付けるのかは極めて難しい問題です。前任の三高編集主幹が引いて下さったルールに則りながら、さらに紙面充実の方策を新しい編集委員会のメンバーと相談していきたいと思っています。

さて、本号についてですが、昨年、退任される医学部教授の最終講義がコロナ禍で行うことができず、本誌にその内容を掲載させて頂くことになりました。実はこれまで、最終講義を印刷物の形式で保存していないことが判明しましたので、これを契機に退任教授の最終講義を原稿として執筆して頂くこととなりました。

今年度は堀尾嘉幸先生(薬理学講座)、三浦哲嗣先生(循環器・腎臓・代謝内分泌内科学講座)、下濱俊先生(神経内科学講座)の3名をお願いしております。実はこの編集後記を書いている時点で、令和2年度の最終講義がどうなるかは決まっていないのですが、いずれにしても退任される3名の教授のこれまでの業績を改めて確認し、さらに長年本学の研究教育にご尽力された諸先生からのメッセージを受け取って頂きたく、是非ご一読下さい。また、廣田亮介先生の原著論文に加え、本学医学部の若手研究者の活動をより学内に「宣伝」するため、6名の先生から研究論文紹介に原稿を頂きました。代表的な図表もつけて頂いており、アブストラクトよりは平易に全体像が理解できる短報ですので、原著にあたるきっかけになればと思います。内容が専門外領域であっても活動の場を同じくする他の研究者・教室の活動を知ることは、単純に刺激になるとともに自らの研究に応用できる可能性を提供できるのではないかと考えます。特に解剖学第二講座助教の齋藤悠城先生の論文(Exercise enhances skeletal muscle regeneration by promoting senescence in fibro adipogenic progenitors. Nat Commun 2020; 11: 889)は骨格筋間葉系前駆細胞の細胞老化が筋再生に及ぼす影響を解析した研究であり、令和2年度の本学若手研究者最優秀論文賞を受賞されています。

教室などにこっそり置いてある本誌を手にとったときに、最後のこの編集後記だけを斜め読みする方もいらっしゃるかと思いますが、上述の駄文を参考に是非、本誌全体に目を通して頂ければ幸甚です。

(編集主幹 高橋 裕樹)